

レクリエーション・ワークショップが 指導者養成に果たした役割について

—その足跡と時代背景とのかかわり—

○ 高橋 伸 (国際基督教大学)

山崎律子 (余暇問題研究所)

キーワード： レクリエーション ワークショップ 指導者養成 指導者講習会

1. はじめに

レクリエーション運動を展開していく上で、レクリエーション指導者の果たす役割は大きい。戦後から現在まで多くの指導者が養成され、レクリエーション運動の推進の一翼を担ってきた。しかし、近年急激な社会変化と価値観の多様化が進む一方、人々のライフスタイルも時代とともに変化し、最近ではそれぞれが独自に興味をもったレジャー活動を実施するものが増化してきている。こうした常に変化する社会状況の中で、現在活躍中のレクリエーション指導者を含め、時代に対応できる指導者養成をいかに行うかは、今後のレクリエーション運動を進めてゆく上で、大きな課題と考える。こうした新たな時代に対応する方策を考える際、ひとつの示唆を得るものとして、過去になされたことを、その状況や時代背景との関わりから考察することがよく用いられる。

今回の目的は、戦後10年余りたったレクリエーション運動の復興期を前提とし、成長期にあたる昭和31(1956)年から昭和42(1967)年までの12年間、三隅達郎を中心とした国際基督教大学体育科主催で行われた「レクリエーション・ワークショップ(以後レク・ワークショップと略す)」について掘り起こし、当時の指導者に果たした役割を、時代背景との関わりを視点に解明してゆこうとするものである。

本研究の方法は、当時のレク・ワークショップの記録・資料をまとめ、歴史的状況を比較検討し、さらに今回おこなった当時の参加者への自由記述によるアンケートを含めその歴史的意義を考察した。

2. 社会状況とレクリエーション運動、特に指導者養成の状況

ここでは、レク・ワークショップ開催の前提と考えられる戦争後の昭和20年代から、ワークショップの終了した昭和41(1966)年頃までを概観する。

戦後のレクリエーション運動は、日本の民主化政策とともない、アメリカの占領軍GHQの民間情報教育部CIEの担当官が普及に積極的であったこともあっていち早く展開された¹⁾。昭和23(1948)年8月日本レクリエーション協会が設立され、全国的な組織づくりがまず始まった。

翌年の昭和24(1949)年6月に初めてレクリエーション活動の奨励を盛り込んだ「社会教育法」が制定された。占領軍当局の示唆もあり、とにかく普及することに重点がおかれ、内容は手軽にできるフォークダンス・ゲーム・歌・軽スポーツなどの活動種目中心であった。こうした普及指導は、文部省、各都道府県教育委員会を通じて行われた²⁾。また、同年8月に日本レクリエーション協会と文部省の共催で「第1回レクリエーション指導者中央講習会」が行われている。この時代のレクリエーション指導者の養成は、中央主導で数多くの実技指導者を育てた時代といえる。

昭和30年代は「神武景気(昭和31・32)」「岩戸景気(昭和34~36)」「オリンピック景気(昭和37~39)」といわれるような経済成長の時代が始まり、昭和35(1960)に所得倍増計画が発表され年高度経済成長期に入った。人々の暮らしは経済的に豊になるとともに、余暇時間が増大し、消費社会、マス・レジャー時代が到来する。この時期になると、経済発展にともない企業が生産性向上や福利厚生のための職場レクリエーション・リーダーの要請が急激に増えた。日本レクリエーション協会ではこれに対応し、昭和38(1963)年からレクリエーション学苑を開始し、各企業独自でも職場リーダーの養成を始めていた。しかし、地域社会や団体におけるレクリエーション指導者の養成は、必ずしも並行して増加した訳ではなかった³⁾。

3. レクリエーション・ワークショップのねらいと設立の背景

第1回の要項の趣旨には「日本に於けるレクリエーション活動の現状を相互に分析批判し合い、レクリエーション関係者が現在及び将来に対してその指導理念を確立し、健全なるレクリエーション活動の運営・普及に寄与せんとするものである」とあり、これを具体的に表すものとして、次の特徴があげられる。

まず、対象者は当初からレクリエーション関係者としており⁴⁾、第3回には「既に学校、事業所、団体などに於いて、レクリエーション関係の指導経験を有する指導者」とさらに明記している⁵⁾。これは新しく指導者を養成するのではなく、一貫してレクリエーション活動を実践している指導者のための会であった。

次にワークショップ形式で行ったことがあげられる。当時の記録によるとワークショップを「建設的、具体的行動案を参加者自身が小グループに分かれて築き上げること」と定義し⁶⁾、教わるための講習会ではなく、参加者が主体となって進められるものであった。当時のレク・ワークショップのプログラム記録には講演者と書いてあっても講師、先生、指導者という表記はなく座長、司会、発表者、助言者とあり、主催者のワークショップ形

表1 レクリエーション・ワークショップの主題

回/年	主 題	参加者
第1回(1956)	レク活動の具体的方策の確立。指導力の強化。	42
第2回(1957)	レク活動の具体的方法を作り上げる、指導力を強化する。	46
第3回(1958)	レク活動に具体的方法・行動案を作り上げ、その指導力を強化する。	40
第4回(1959)	「明るい生活とレクリエーション」	48
第5回(1960)	「実生活とレクリエーション」	56
第6回(1961)	「レクリエーションに於ける諸問題」	30
第7回(1962)	「体育・スポーツ・レクリエーション」	59
第8回(1963)	「余暇 - 人間生活のチャレンジとして -」	51
第9回(1964)	「最大多数の最大幸福 - レクリエーション活動の創造的推進 -」	56
第10回(1965)	「今日から明日へのレクリエーション」	54
第11回(1966)	「指導技術の向上 - より楽しく・より効果的・レク活動をめざして -」	73
第12回(1967)	「レクリエーション指導の反省」	25

参加者合計 580名

式へのこだわりがみられる。さらに表1の各回の主題を見ると、レクリエーションの生活化への対応と、そのための理念の構築を目指していたことが読み取れる。

こうした指導者のための相互研修と自己研鑽の機会を提供したことは、現在の指導者養成のあり方にも示唆を与えるものと考えられる。

4. レクリエーション・ワークショップの内容

開催は毎年8月の中旬から下旬にかけての3～5日間行われた。会場は国際基督教大学構内で、集団生活が原則であり宿泊は学生寮が用いられた。また、第5・6回は1泊2日の日程で東京YMCA山中湖キャンプ場にてキャンプファイアーの実習が行われている。最終回の第12回だけは1泊2日の日程で11月下旬に箱根で行われた。

全体の構成は大きく3つに分けることができる。ひとつは問題提議の発題をもとに、各自の立場で検討し方策をまとめる分科会と、各種活動の指導分類や指導法を作り上げる分科会、そして指導力を高めるための実技実習やクリニックとよばれる活動とがあった。

方策をまとめる分科会は著名な大学教授やレクリエーション関係の役職者などによる主題に基づいた問題提起について、参加者がいくつかのグループに分かれ、それぞれがかかえる問題と照らし合わせ、具体的な方策がまとめられた。第4回を例にとると主題は「明るい生活とレクリエーション」であり、発題は日本YMCA同盟協力主事であったアール・R. バックリーによる「アメリカのレクリエーション運動と日本のレクリエーション運動の相違点」と、元中央大学教授故久松栄一郎による「レクリエーション活動の望ましい方向づけ」があった。これについては「地域・学校・職場のレクリエーション」と「商業レクリエーションと地域レクリエーション」の立場から考えるグループに分かれて行われた。

指導の分科会ではキャンプ、ゲーム、歌、フォークダンスなどの分類や指導法、今後のあり方などがまとめられた。第2回の「組織キャンプの定義」が試みられているのは⁷⁾その一例である。さらに実技実習として新作のゲームや、クロッカー、馬蹄投げ、フライングソーサー（フライングディスク）などの軽スポーツも紹介され、クリニックでは参加者の指導に助言が与えられている。

内容を総合すると、常に実際の場面を想定した理論と実際のつながりをふまえて行われており、充実した内容であった。

5. 参加者の特徴

参加者の募集については、毎回学校、教育委員会、会社・事業所、団体、前参加者などへ約1000通のダイレクトメールを出している。参加者は12回で延べ580名、各回30～73名（表1）で平均すると毎回約50名弱であった。

内訳は大学関係者を筆頭に学校関係者が多く、両者を合わせると少ないときで約5割、多いときでは7割以上を占めている。次に多いのはYMCA・YWCA・ボーイスカウト・ガールスカウトなどの青少年育成団体関係者、次に病院関係者となっている。第7回からは企業関係者が多くなり、職場レクリエーションが盛んになったレクリエーションの「高度成長期」と呼応している。

参加者を概観すると、当時関東学院大学学長故白山源三郎をはじめ、人事院の故柳田享、日本レクリエーション協会関係では故松原伍一、そして東京YWCAの故竹内菊江など当

時から現在までも日本のレクリエーション界をリードされてきた方々が参加されていた。さらに、実施したアンケートの返答によると、レク・ワークショップに参加して啓発され、レクリエーションの研究をはじめた現在活躍中の大学関係者も少なくない。

6. 考 察

戦後のレクリエーション運動におけるひとつの事実として、レク・ワークショップの足跡を、その時代の指導者養成の状況と合わせて見てきた。これらを総合して考察すると、

1. 既に活躍中の指導者のために研修の機会を提供した。

レク・ワークショップ開始当時の指導者は、中央機関の主導で既に数多く養成されていたと思われる。しかし、レクリエーション指導者となってから後のさらなる研修の機会はなく、こうした状況を打開すべく民間レベルでこれを行ったことは重要な意味があったと考える。また、お互いの情報交換の場を提供したことも評価できる。

2. ワークショップ形式で実力のある指導者を育てた。

単なる教えてもらう講習会ではなく、レクリエーション運動の展開についてお互いが生活を共にし、それぞれの立場で話し合い、学び合う形式をとったことで、実際に沿った実力のある指導者として育てていったと考える。アンケートにもレクリエーション運動の中心的存在である方々と生活を共にし、学び合ったことで「生き方とのかかわりであるということ」を学んだ」とある。

3. レクリエーション運動の生活化に理論と実践両面から貢献した。

アンケートに「レクリエーション運動のさきがけとして、わが国のレクリエーション運動に大きな意味をもって来たと確信します」とある。戦後のレクリエーション運動は、実技種目中心の指導で始まったり、企業の意向をふまえての成長期を経てきた。しかし、その時代にあってもレク・ワークショップでは、常に一般社会の人々の潤いのある生活を目指し、人間生活に根ざした理論と実技の両面から指導者養成を行ったことは、レクリエーションの本質からみても高く評価できるものと考えられる。

7. まとめ

今回は、37年前に始められたレク・ワークショップが果たした役割の一端を、歴史的視点から解明した。これらの内容は現代でも十分に通用するものであり、これからの指導者養成のあり方にひとつの示唆を与えてくれた。今後はこのレクリエーション・ワークショップの内容と、現代の指導者養成の内容とを分析し、役立てる方策を検討したい。

引用文献

- 1) 日本レクリエーション協会編 「日本レクリエーション協会30年史」 1977. p.37
- 2) 江橋慎四郎編 現代レクリエーション講座1 レクリエーション概論 アースポーツマガジン社 1974. p.96
- 3) 前掲 1) p.103
- 4) 国際基督教大学体育科編 第1回レクリエーション・ワークショップ記録 1958 p.2
- 5) 国際基督教大学・レクリエーション研究会編 第3回レクリエーション・ワークショップ記録 1958 p.2
- 6) 前掲 5) p.2
- 7) 国際基督教大学・レクリエーション研究会編 第2回レクリエーション・ワークショップ記録 1958 pp.36-38